土井道子記念京都哲学基金主催
「昭和の哲学」シンポジウム（2008 年 12 月 15 日~17 日）報告

昭和思想史におけるマルクス問題
―三木清に焦点をあてて―

平子友長

A．マルクスとマルクス主義の間　―マルクスはいかなる意味でマルクス主義者ではなかったのか―

一九七四年以降開始され、現在も刊行が続けられているドイツ語版マルクス・エンゲルス全集（Marx-Engels-Gesamtausgabe 以下 MEGA と略記）は、第一部門「著作、論文、草稿」（全三二巻）、第二部門「『資本論』の諸版およびその準備草稿」（全一五巻二三冊）、第三部門「書簡」（全三五巻）、第四部門「抜粋ノート、覚え書き、雑記」（全三二巻）の四部門から構成されている。MEGA 刊行の最大の意義の一つは、マルクス、エンゲルスの抜粋ノートを時系列的にすべて公刊することによって、彼らの諸作、草稿、書簡からは知ることができない、彼ら自身の研究過程をつぶさに検討する資料を提供していることである。この第四部門は、第一、二、三、四、六、七、八、九、、一二、三一、三二巻が刊行されたのみで、四部門中最も編集が遅れている部門であるが、未刊行の諸巻も含め、マルクス、エンゲルスが、いかなる時期にいかなる文献を精読していたのか、その概要を把握することができる。

それによって私たちは、マルクスとエンゲルスの思考様式の違いを含め、これまでマルクス主義の名の下に語られてきたおよそすべてのテーゼや主張が、（一）マルクス自身の思想ではなく、エンゲルスによって解釈されたマルクス主義（本稿では、これを便宜的にエンゲルス主義と呼ぶ）であるか、（二）ある特定の時期まではマルクス自身が支持していた理論ではあるが、その後、撤回されるか、修正された理論であるか、少なくとも批判的検討の対象とされた理論であったことを文献的にほぼ証明することができる。以下に、重要な論点を時系列的に挙げてゆく。

A-1.　マルクスの哲学は存在するか？

A-1-1.　マルクスの哲学について語ることができるのは、1846 年『ドイツ・イデオロギー』までであり、その場合でも、哲学一般（観念論と唯物論の両者を含め）に対する批判としての実践的唯物論であった。

マルクス独自の哲学は, ヘーゲル哲学の批判を通して, しかし常に唯物論哲学も含めた「哲学一般の批判」（『経済学・哲学草稿』）として遂行された。

【『ヘーゲル国法論批判』】

マルクスの批判の要点は，哲学（ないし科学）が経験的現実的対象世界から自立化した一つの哲学（科学）的世界を構築し，抽象的思考によって「諸範疇」，「諸概念」の体系を作り上げ，これらを対象の如何にかかわらず妥当する普遍的法則として個別的具体的諸対象に適用することによって，真の理論的認識が得られると見なす哲学（科学）観を批判することに向けられている。マルクスが批判した考え方によれば，対象を「哲学（科学）的」に認識するためには，当該の対象の関係，構造，過程を記述するのにふさわしい論理学的諸概念（例えば本質と現象，必然性と偶然性，普遍性，特殊性および個別性など）を見つけてやりさえすればよい（具体的対象の抽象的概念の下への包摂）。ひとたび包摂する概念諸規定が発見されれば，それ以降の展開は哲学的論理学がすでに用意しているから，それを「適用」すればよい，従って対象的認識の発展は究極的には，普遍的に「適用可能」な諸概念の体系＝論理学を精緻に作り上げることができるかどうかにかかっている。こうして「真理」の認識において，概念が主体化され，概念が「適用」される現実的対象は概念の述語に転倒する。これをマルクスは「主語と述語の転倒 Umkehrung」*MEGA I/2*, S.12)と呼ぶ。

これがマルクスによって「哲学の仕事」，「哲学のモメント」（*ibid*. S.18）と呼ばれた思考様式である。このような「哲学的」思考様式を克服することが，若きマルクスの知的関心の中心をなしていた。

マルクス自身の積極的立場は，『ヘーゲル国法論批判』（一八四三年）においては、「独自な対象の独自な論理 die eigentümliche Logik des eigentümlichen Gegenstandes を把握すること」と定式化されている。「独自な対象の独自な論理学」＝「ザッヘの論理学」とは，第一に, 対象の種差 differentia specifica にこだわり, 対象の種差を徹底的に解明する方法である。「種差を明らかにしないような解明 Erklärung は，解明とはいえない」(*ibid*. S.12)とマルクスは言う。

「思考における具体的なもの」と「現実に具体的なもの」との原理的区別を常に忘れないこと，これが「ザッヘの論理学」の第二の意義である。この両者の区別を抹消し，後者を前者に還元したのが，ヘーゲルであった（「思考と存在の同一性」）。青年マルクスは，「対象」，「現実性」，「存在」等は，概念（＝思考）諸規定として展開することはできず，概念諸規定のほうこそ前者の存在＝所与性を前提として初めて（それらの述語として）意味を獲得すること，従って「対象」，「現実性」，「存在」等は，先概念的なものとしてより根源的であるという認識を獲得した。これが，マルクスの哲学が唯物論である一つの理由である。

【『フォイエルバッハに関するテーゼ』と哲学の根本問題】

マルクスにとって「哲学（哲学批判としての）の根本問題」とは，以下の二つの問いであった。

第一に，世界を認識する認識者自身はどこにいるのかという問い（場所 locus の問題）であり, 第二に, 認識者が一人の生きた人間として世界に対して認識的に関わるということは, 生活者としての彼の生の全体過程の中でどのような特殊な「生活様式」をなしているのか, 言い替えれば，われわれが自らを「認識者」として限定し，世界を「認識対象」として限定

して，世界と関係することは，われわれが世界に対して実践的に関わって生活する営み全体の中で，どのような意味を持つのかという問い（生の様式 modus vivendi の問題）であった。

「第一の問い」からは，世界を認識する者（＝哲学者，科学者）と認識される対象（＝自然および社会）との区別を前提としない哲学が構想される。認識主体を認識対象である対象的世界の中に置き入れることによって初めて，「対象を主体的に把握する」（『フォイエルバッハに関するテーゼ　一』）ことが可能となる。

「第二の問い」からは，認識活動を「悟性」ないし「理性」の活動として抽象的に自立させ，世界について普遍的に妥当する命題を「客観的真理」として語り始める一切の思考が批判され，認識活動はまずもって具体的感性的存在である人間の実践＝生活過程の一契機として捉え直される。

マルクスは，認識主体を世界の外部に自立させ，世界に対する主体の認識的関わりを世界の中での主体の生の全体過程から自立させる知の営みを「抽象的 abstrakt」と呼び，このように自立化した認識主体が一面的に認識対象として定立された世界に対してとる関係を「観照 Anschauung」ないし「観想 Theorie」と呼んでいる。マルクスによれば、フォイエルバッハの唯物論も含め従来の唯物論は，このような「抽象的」思考を前提としていた。それゆえ哲学的唯物論は，「哲学」というエレメントの内部で観念論といかに激しく対立抗争していたとしても，それが「哲学」という本質的に「抽象的」思考の場面にとどまる限り，それは観念論なのである。

> テーゼ　一：「従来のすべての唯物論（フォイエルバッハの唯物論も含め）の主要な欠陥は，対象，現実，感性が単に客体の形式すなわち観照の形式の下でしか捉えられず，感性的に人間的な活動である実践として捉えられない，つまり主体的に捉えられないことである。」(*Werke Bd.3*,S.5)。

> テーゼ　三：「環境と教育の変化に関する唯物論の学説は，…教育者自身が教育されねばならない[1]ことを忘れている。それ故この学説は，社会を二つの部分に区分せざるをえないが，その際一方の部分は社会を越えた位置にあるのだ。」(*ibid.* S.5f.)。

「テーゼ　三」が示しているように，マルクスは、社会を「客観主義的」に考察するために観察者を観察対象としての社会（「普通の人々」）から切り離す認識態度だけを「観照的立場」として批判するのみならず，社会を「変革」するために変革者を変革の対象としての社会（「普通の人々」）から切り離し，変革者を特権的位置に置き，かくして社会を「啓蒙された」「エリート」と「啓蒙されない」「普通の人々」との「二つの部分に区分」する実践的な思考形態さえも「観照的立場」として批判している。マルクスによれば，政治的「エ

---

[1] 「教育者自身が教育され」るためには，教育者自身が教育される側の人々が置かれている場所と同じ場所に身を置かなければならない。つまり教育「主体」と教育「客体」との区別を撤廃しなければならない。

リート」と「一般大衆」との区別を前提して，能動者としての「エリート」が受動者としての「大衆」に働きかけて社会を（労働過程における生産者と生産手段の関係の如く）目的意識的に「変革」しようと考える政治運動論はいまだ「観照的立場」に立つものであり，「世界をただ解釈するだけ」〔テーゼ　十一〕にとどまる。

マルクスの「実践」、「実践的」という用語は，「観照」ないし「抽象（的）」に対置される概念であるが，この概念の要諦は，主体（認識主体および政治的変革主体）を客体＝対象（「普通の人々」からなる社会）から「抽象的に」切り離さないために，前者を後者に不断に送り返してゆく立場を表現する概念なのである。これがマルクスの唯物論が実践的唯物論と呼ばれるゆえんであった。

「意識が生活を規定するのではなく，生活が意識を規定する」(『ドイツ・イデオロギー』*ibid*. S.27)。

唯物史観において「意識」とは，認識者自身の意識のありようである。社会を（理論的考察の対象として）客観的に観察していると考えている認識者に向かって，「あなたはどこにいるのか〔場所の問題〕」，「あなたが〔ある対象を〕認識するということは，あなたの生活の営みの全体の中でどういう位置を占めるのか〔生の様式の問題〕」がきびしく問いただされ，このことによって認識者自身が再び対象的世界の中に送り返され，思考過程それ自体も一つの生活実践＝生の様式として実践的に捉え返される。

マルクス主義にとって最大の不幸の一つは，本来社会科学者の認識主体としての歴史的社会的制約を社会科学者本人に向かって主体的に反省を迫ることを趣旨としていた唯物史観が，このような主体的反省を欠落させたまま，社会現象を合法則的に認識するための科学的方法として解釈され，「科学的」であることにマルクス主義の優位性を見いだす思想態度が伝統として形成されてしまったことである。唯物史観の諸命題を，認識主体を認識対象の外部に自立化させた上で、認識対象にのみ適用すれば，唯物史観はいわゆる「経済決定論」となる。元来現実的諸個人の生活実践に対して当事者にとって不可視の「法則性」を「事前決定」する啓蒙主義的な知の僭越＝「先回りする知」を批判・克服するための方法であった唯物史観が，それの「科学主義的」利用においては，認識主体（歴史法則を認識する研究者）と認識対象（歴史法則によって支配される人々）との分断を固定化する方法に逆転してしまった。

.A-1-2.　『ドイツ・イデオロギー』以降のマルクスにとって「哲学」は存在しない。

「主観主義と客観主義、唯心論 Spiritualismus と唯物論、能動的活動 Thätigkeit と受苦 Leiden は、社会的状態 der gesellschaftliche Zustand になって初めて、･･･両者がそのように対立しあって存在するあり方をなくすことが、わかる。理論上の諸対立それ自体は、ある実践的な仕方、人々の実践的なエネルギーによって初めて、解決されることができ、従って理論上の諸対立を解決することは、認識の課題には留まらず、一つの現実的な生の課題 Lebensaufgabe なのである。哲学は現実的な生の課題であるものを単に理論的課題にすぎな

いと捉えたがために、哲学はこの生の課題を解決することができなかったのである。」（『経済学・哲学草稿』第三ノート　MEGA I-2, S.271 傍点はマルクス）

上の引用で、「社会的状態」とは、資本主義的経済システム（当時のマルクスの用語で言えば私的所有 Privateigentum）を止揚した状態（当時のマルクスの用語で言えば、共産主義ではなく社会主義）を意味する。

「実践的」とは、「理論的」ではないことを意味し、かつ「現実的な生の課題」（社会的な貧困、差別、苦しみなど）を、「理論的」ではない仕方で解決することを意味する。もちろんそのためには、理論が必要ではあるが、それは「現実的な生の課題」を具体的に記述し、分析し、総合する経験科学的な理論でなければならない。マルクスは、「現実的な生の課題」を抽象的諸概念の操作によって「解決」する哲学（哲学的唯物論も含め）と、明確に訣別したのである。

『ドイツ・イデオロギー』以降のマルクスにとって、哲学は、抽象的理論の次元で真理を語る言説として、否定的な意義しか持たなかった。マルクスは、一八八三年に死ぬまで数千点に及ぶ文献の詳細な抜粋ノートを書き続けた。しかしその中には、哲学書に分類される文献は全くない。一八四七年以降のマルクスのテクストから哲学的メッセージを読み取ることは、研究者の自由であるが、それを「マルクスの哲学」として語ることは、それ自体、マルクスに対する侮辱となる。初期マルクスの哲学と対照させて、後期マルクスの哲学について哲学的に語ることはできない（Althusser、廣松渉に対する批判）。

A-2.　唯物史観について

A-2-1.　唯物史観と史的唯物論との違い

唯物史観 die materialistische Geschichtsauffassung は、唯物論的な歴史把握の方法についての言説であって、歴史哲学ではない。それが、哲学的唯物論の一構成部分として構想された史的唯物論 der historische Materialismus（エンゲルス）との決定的な相違である。

A-2-2.　唯物史観の一般的公式の妥当性

いわゆる「唯物史観の一般的公式」と言われているものは、『経済学批判　第一分冊』（一八五九年）執筆当時までのマルクスの理解であって、『資本論』第一巻執筆（一八六四～一八六七年）段階においては、それに重要な修正が加えられた。

「私〔マルクス〕の研究にとって導きの糸 Leitfaden として役立った･･･一般的結論 das allgemeine Resultat」（*MEGA II-2,* S.100）は、大まかに、以下の二つの命題から構成される。

（一）生産諸力が生産諸関係を規定する。

「生産諸関係は、人々の物質的な生産諸力のある限定された発展段階に対応している entsprechen。」「物質的生産諸力は、それらの発展のある一定の段階において、既存の生

産諸関係、ないしは生産諸関係の法的表現に過ぎない所有諸関係と･･･矛盾するに至る。生産諸関係は、生産諸力を発展させる諸形態から〔生産諸力の発展を抑える〕桎梏に転倒する。その時一つの社会革命の時代が始まる。」（ebenda）

（二）土台が上部構造を規定する。

「生産諸関係の全体 Gesamtheit は、社会の経済的構造すなわち実在的土台 die reale Basis をなし、その上にある法的および政治的上部構造 Ueberbau がそびえ立つ。そしてこの実在的土台に、限定された社会的意識諸形態が対応する。」（ebenda）

マルクスは、『一八六一～一八六三年経済学草稿』、『直接的生産過程の諸結果』（一八六三～一八六五年）などの研究によって、資本が一つの生産関係でありながら、工場内で合理的組織的経営を行うことによって独自な生産力を（工学的技術に由来する生産力とは独立した）創造することを認識するに至り、これを「資本の生産力」と呼び、この「資本の生産力」が十全に発展される生産様式を「資本主義に固有な生産様式」と見なすようになった。合理的経営を生産諸力の主要な源泉の一つと見なすマルクスの新しい資本主義認識は、二〇世紀に誕生する経営学、組織論、官僚制論などを先取りするものであった。しかし、これによって生産諸力が独立変数として生産諸関係を決定するという命題は、事実上、撤回されたといえる[2]。

A-3.　『資本論』は、マルクスの主著であるか?

A-3-1.　『資本論』のどの命題が、疑問に付されるか?

「この著作〔『資本論』〕で私が研究しなければならないことは、資本主義的生産様式とそれに対応する生産諸関係および交通諸関係である。それらの古典的な場所は、現在までのところ、イングランドである。これが、イングランドが私の理論的展開の主要な例証として役立つ理由である。･･･資本主義的生産の自然諸法則から発生する社会的敵対諸関係の発展度が高いか、低いかそれ自体は、本書の主題ではない。この諸法則それ自体、冷酷な必然性をもって作用し、貫かれる諸傾向を、本書は主題とする。産業発展の進んでいる国 Land は、発展のより遅れている国にその国自身の未来像を示すだけである。」（「『資本論』第一版序文」Marx 1962, S.12）

『資本論』第一巻は、以下の諸点を前提としていた。

[2] マルクスが一八六〇年代に到達した新しい資本主義認識と、それを表現する「資本の生産力」、「資本主義に固有な生産様式」、「資本の下への労働の実質的包摂 die reelle Subsumtion der Arbeit unter das Kapital」などの諸概念の意味、それらが一八五九年『経済学批判　第一分冊』「序文」における「一般的結論」をどのように修正しているのかなどについては、平子（一九九一）第二部を参照。

（一）　資本主義的経済システムは、国民国家単位に発展すること、
（二）資本主義的経済システムが最も発展している国民国家はイングランドであり、イングランドはそれ以外の諸国民国家に対してそれらの国の未来像を提供すること、
（三）上記の認識は、世界のプロレタリア階級の解放運動においてイングランド労働者の労働運動が前衛的役割を果たすという認識と結びついていた。

A-3-2.　アイルランド問題との出会いを契機とするマルクスの資本主義認識の変化

一八四八年『共産党宣言』を執筆した時点ではマルクスは，資本主義的世界市場の発展の歴史的帰結に関して次のような展望を抱いていた。

大工業と世界市場を生み出したブルジョアジーは，家父長制的，封建的等々の一切の伝統的社会諸関係を解体し，世界全体を資本家階級と労働者階級の二大階級にますます分割してゆく。資本主義的生産における生産諸力と生産諸関係の矛盾は，労働者階級による権力獲得による私的所有の廃絶とアソツィアツィオーンと呼ばれる協同社会の樹立によってのみ克服することができる。資本主義の世界市場的性格に対応してこの革命は一つの世界革命としてのみ成就することができる。この世界革命において中心的役割を果たすものは，資本主義の母国であるイングランドにおける労働者階級の勝利である。植民地や従属国における民族解放運動の帰趨も，究極的には先進資本主義諸国の労働者階級の運動によって決定される。

このような見通しの下にマルクスは，「一八三〇年ポーランド蜂起一七周年記念日のロンドンにおける国際集会」（一八四七年十一月二九日）において次のように述べていた。

> 「すべての国のうちでイングランドこそが，プロレタリアートとブルジョアジーの対立が最も発展している国である。従ってイングランドのプロレタリアートのイングランドのブルジョアジーに対する勝利こそ，あらゆる抑圧されている人々の彼等の抑圧者たちに対する勝利にとって決定的である。従ってポーランドはポーランドにおいてではなく，イングランドにおいて解放されなければならない。」（*Werke* 4，S.417 下線は平子）。

「ブルジョアジーの革命的役割」（*Werke* 4，S.464）に対する高い評価に基づいてマルクスは，世界史の基本的対抗基軸を西ヨーロッパの文明と東ヨーロッパ（とりわけ帝政ロシア）およびアジアの野蛮との対立という図式で把握していた。一八五三年における一連の「インド評論」おいてもマルクスは，文明化を促進したイギリスのインド支配を次のように肯定的に評価していた。

> 「それらの〔インドの〕家族共同社会 family-communities は、家内工業に基づいていた、つまり家族共同社会に自給力を与えていた、手織り、手紡ぎ、手耕農業の独特な結合に基づいていた。イングランドの干渉は，･･･これらの半野蛮，半文明の小規模な共同社会 communities の経済的基礎を爆破することによって共同社会を解体し，こうして･･･アジアで前代未聞の唯一の社会革命を引き起こした。ところで、無数の勤勉かつ家父長的で無害な社会諸組織が解体され、それらの最小単位に分解されたうえで、苦海に投げ込まれると同時に、個々の構成員たちが彼等の古代的な文明形態と彼等の世襲的な生活手段とを喪失

することを目撃することは人間の感情をいたく傷つけるものではあるが、これらの牧歌的な村落共同社会 village-communities こそはつねに、･･･東洋的専制主義 oriental despotism の強固な基礎でありつづけたことを忘れてはならない。･･･これらの小共同社会が、カーストの差別や奴隷制に汚染されていたこと、人間を環境の主権者に高めるのではなく、人間を外的環境に隷属させたこと、みずから発展して行く社会状態を決して変化しない自然の運命に変えてしまったことを、忘れてはならない。･･･イングランドの犯した犯罪が何であれ,アジアの社会状態における一つの根本的革命を引き起こしたことで,イングランドは歴史の無意識的な道具であったわけである。」(「イギリスのインド支配 The British Rule in India」一八五三年六月二五日、*MEGA I/12* S.172-173　下線は平子)。

イングランド資本主義によるインドに対する文明および伝統的生活様式の破壊がいかに凄まじいものであっても、それが「アジアに西欧社会の物質的基礎を据える」(「イギリスのインド支配の将来の諸結果 The Future Results of British Rule in India」1853 年 8 月 8 日、*MEGA I/12*, S.248)使命を果たす限り、イングランド資本主義の政治的経済的侵略は、当時のマルクスにとって「歴史〔発展〕の無意識的な道具」としてなお肯定されていた。

【アイルランド問題との出会い】

アイルランドは、一八〇〇年の合同法により、翌一八〇一年、連合王国に併合されたが、その後も分離独立を求める民族運動は継続された。一八五〇年代末にアメリカ在住のアイルランド移民によってアイルランド独立を目ざす秘密結社フェニアン党が組織され、ついでアイルランド本土にも組織が拡大された。一八六七年二月から三月にかけてアイルランド各地でフェニアン党員が蜂起したが鎮圧され、多くの指導者が逮捕され、裁判にかけられた。その渦中の一八六七年九月一八日マンチェスターでフェニアン党員ケリーとディージを乗せた護送車が襲撃され、警官一名が殺された。ケリーとディージは逃亡に成功したが、逃亡を幇助した罪で五名が逮捕され、死刑判決を受けた。その後一名は特赦により放免、一名は終身刑に減刑された。

マルクスは、この死刑判決に対する抗議とフェニアン党員の救援運動への参加を国際労働者協会（第一インターナショナル）総評議会に呼びかけ、十一月二〇日に総評議会の特別会議を開催し、処刑の中止を嘆願する国務大臣宛の「請願書」を採択したが、「嘆願書」にはこれに反対したイングランド代表の署名はない。マルクスは十一月一九日と二六日総評議会でアイルランド問題に関する公開討論を行ったが、その間十一月二三日残りの三名に対する死刑が執行された。この問題を契機に、マルクスは、イングランドによるアイルランド植民地化の歴史を詳細に研究し始める。この問題に関するマルクスの抜粋ノートは、MEGA 第四部門第二一巻（未刊）に収録される。

アイルランド問題は、マルクスに対してそれまでの資本主義認識を根本的に反省する機会を提供した。

第一に、資本主義システムが一つの世界システムとして発展して行く以上、階級関係もまた国民国家の枠組みを超えた次元で発展して行かざるを得ない。その際、世界システムにおける階級関係の展開は、諸民族間の区別を解消する方向で二大階級への編成が進行するであろうという『共産党宣言』時点における予測を裏切って、逆に民族ないしエスニック諸集団

の区別を階級的分断線として重層的に利用して行くことである。民族間の対立が階級的対立の成熟にもかかわらず併存するのではなく、階級的対立が民族間の差別・分断線上に、それを利用する形で形成されて行くがゆえに、資本主義世界システムの展開に伴って抑圧民族と被抑圧民族との対立が資本家階級と労働者階級の階級対立の世界市場的形態として特別の重要性を持つ。

第二に、資本の文明化作用は、植民地という形態を取って資本主義化が進行する場合には必ずしも妥当しない。イングランド資本主義は，合併以後アイルランドにおける工業生産を破壊し，農業生産を荒廃させ，大量の移民と人口の絶対的減少をもたらすほどの貧困化を強制した。イングランド資本主義こそがアイルランドを「低開発化」させた元凶であった。

第三に、イングランドの労働者階級は，イングランドの資本家階級との関係においては確かに労働者階級であるとしても、資本主義世界システムの内部では、むしろイングランドの資本家・地主階級と共同の利害関係を持ち、かつそのように行動している。マルクスはここから、アイルランドの「完全な分離」ないし「〔イングランドとの〕対等な連邦」を実現することが、「イングランドの労働者階級の解放の前提条件である」（*Werke* 16, S. 417）と主張するに至った。以下の発言は、マルクス自身の自己批判と見ることができる。

「アイルランドの体制をイングランドの労働者階級の支配的影響力 ascendancy によって転覆させることができるのだと、私は長い間信じてきた。私はこの見解を常に『ニューヨーク・トリビューン』紙上で主張してきた。研究をより深めることによって、私は今ではそれと反対のことを確信するようになった。イングランドの労働者階級は、アイルランドから手を切らない限りは、何事も成し遂げられないであろう。梃子はアイルランドに据え付けなければならないのだ。このことのためにアイルランド問題は社会運動全般にとって非常に重要なのである。」（「マルクスのエンゲルス宛手紙　一八六九年一二月一〇日」*Werke* 32, S. 415　下線は筆者）。

アイルランド問題との出会いが切り開いた新しい地平は、実践的には連合王国における労働者階級の階級的運動の軸心をアイルランドに置くことであった。しかしこれは理論的には、資本主義世界システムの研究の理論的重心を資本主義の中心部イングランドの経済分析から、資本主義と非資本主義ないし前資本主義的経済システムとがせめぎ合うフロンティアに移すことを示唆するものであった。同時にマルクスは，このフロンティアにおける対抗関係の中から全体としてどのような新しい経済関係が創出されてゆくのかについては，それぞれの地域社会の内部編成および西洋諸国との対外関係を個別具体的に詳しく研究した上でない限り，いかなる展望も語りえないことを次第に深く認識するようになった。

以上の脈絡に照らしてみた時、有名な「ヴェーラ・ザスーリッチへの手紙」（一八八一年三月八日）は、きわめて重い意味を持っていた。

「この運動〔資本主義的生産のゲネシス〕の『歴史的宿命性』は、西ヨーロッパ諸国に明示的に限定されております。･･･従って『資本論』で示された分析は，〔ロシアにおける〕

農村共同体 la commune rurale の生命力に関して，賛否いずれの論拠も与えるものではありません。」（*MEGA I/25*, S.241）。

最晩年のマルクスがかれの理論を世界のあらゆる地域に妥当する普遍的歴史法則として利用しようとしたロシアのナロードニキのなかの一傾向に対して，明確な拒否の立場を貫いたことは，マルクス理論の現代的再評価に携わるわれわれが，ぜひとも注目しなければならない点である。

「私の批評者にとっては,西ヨーロッパにおける資本主義の発生史に関する私の歴史的素描を,あらゆる民族の置かれている歴史的状況がいかなるものであろうと,彼等が宿命的にたどらなければならない普遍的行程に関する一つの歴史哲学的な理論に作り替えることが,絶対に必要なのです。しかしこういうことは願い下げにしてほしいと思います。(こういう試みは私にとって，あまりにも大きな名誉であると同時に，あまりにも大きな恥辱となります。)」（「『祖国雑記』編集部への手紙」*MEGA I/25*, S.115-116）。

A-3-2. 一八六九年以降、マルクスは『資本論』の完成とは別の研究を行っていた。

事実マルクスは、一八七五年以降、農奴制廃止令（一八六一年）以降のロシアの経済事情の研究に取り組み始め、それは一八八三年の死の直前まで続けられた。また一八七九年一〇月頃から約一年間はインド史に関する詳細な抜粋ノートを作成している。これらの研究は、『資本論』が想定していた範囲を越えるものであった。最晩年のマルクスには、『資本論』の完成を断念するという犠牲を払ってさえも解明したい新しい研究領域と研究課題が開かれてきたのだと、筆者は考えている。

資本主義的経済システムはそもそも持続可能な経済システムであるのかという懐疑が、先進諸国の労働者階級が世界の抑圧された人々の解放のために指導的役割を果たすことができるのかという懐疑を伴って、マルクスの前に次第に大きくなっていった。資本主義は、地球資源および資本主義以前に人類が蓄積してきた文化的諸資源を略奪し、食いつぶすことによってしか存続しえなかったし、今後も、そうあり続けるのではないか[3]、「資本の本源的蓄積」の歴史は、資本主義経済システムが続く限り、継続するのではないか、マルクスがこれらの問題に取り組んでいたことが、一八六九年から一八八三年までに作成した抜粋ノート（MEGA

[3] 世界自然保護基金（WWF）は二〇〇八年一〇月二九日、「生きている地球リポート」を発表した。それによれば、世界中の資源消費は、一九八〇年代半ばに地球が再生産できる供給量を超え、その後、ほぼ一貫して伸び続け、現在は、地球一．三個分を消費している。超過分の消費は、地下資源などの再生不可能な資源の消費によってまかなわれている。国別で最も資源消費が大きいのはアメリカ合衆国で、世界中の人々が合衆国国民と同程度の消費を営むと仮定すると地球四．五個が必要となる。また日本人並みの消費を営むと二．三個が必要になると報告している。

第四部門第二一巻～三一巻）から読み取ることができる。マルクスが集中的に研究したテーマ群は、以下の四点であった。

（一）技術学、地質学、農業技術などエコロジーに関する諸文献（二三、二六、二八、三一巻）
（二）西洋の古代史、中世史に関する、とりわけ農業史、村落共同体、土地所有の歴史に関する諸文献（二四、二五、二六、二七、二八、二九巻）
（三）インド、中国をはじめ非西洋諸地域の歴史、経済、地理などに関する諸文献（二七、二八巻）
（四）ロシアおよびスラブ諸地域に関する諸文献（二二、二四、二七、二八、二九巻）

『資本論』のマルクスの向こうにもう一つの大きな嶺、「最晩年のマルクス」が隠されている。「最晩年のマルクス」の思想は、文献的には、MEGA 第四部門の「抜粋ノート」から推測的に再構成する他ないが、この仕事に取り組むことは、われわれに残された重要な研究課題である。

A-5.　エンゲルスの果たした役割

A-5-1.　マルクス主義的唯物論哲学の創作

「マルクスの哲学」が、哲学的唯物論として存在することを創作したのは、エンゲルスであった。エンゲルスの唯物論理解は、マルクスが「フォイエルバッハにおけるテーゼ　一」において批判した「従来のすべての唯物論の主要欠陥」、つまり対象を単に「客観の形式」で把握するだけで「人間的感性的活動である実践」として「主体的」に把握しないという欠陥（Marx 1969, S.533）を共有している。エンゲルスによれば、哲学の根本問題は、思考（意識）に対する存在の、精神に対する物質（自然）の優位性を主張するものであり、主観－客観の二項対立図式の中で哲学の根本原理を把握するという認識論的構図になお呪縛されている。

A-5-2.　科学的社会主義の創作

社会主義の歴史におけるマルクスの貢献が、社会主義をユートピアから科学へと発展させたことであると理解し、「科学的」であることが、以後、マルクス主義の最重要概念になる一歩を踏み出したのは、エンゲルスであった。マルクスにおいては、「科学的」であることよりも「実践的」であることがより重要であった。

A-6.　レーニンの果たした役割

A-6-1.レーニンは、 哲学をマルクス主義の三つの構成部分の一つとして昇格させた。

A-6-2.　レーニンは、『唯物論と経験批判論』においてマルクスが批判したフォイエルバッハ以前の抽象的唯物論をマルクス主義的唯物論として復活させた。

A-6-3.　レーニンは、『哲学ノート』において、「弁証法・論理学・認識論の同一性」のテーゼを提唱し、以後、このテーゼを詳細に「論証」することが、マルクス主義哲学研究の中心課題であると見なすソヴィエト・マルクス主義の伝統を作り出す契機を与えた。

A-7.　スターリンの果たした役割

A-7-1.　「マルクス・レーニン主義」の創作

「マルクス・レーニン主義」という用語を創作し、マルクス主義内部の敵・味方を判断する基準としてマルクス主義哲学のレーニン主義的段階を承認するか否かに求めた。

A-7-2.　マルクス・レーニン主義哲学の王座への昇格

スターリンは、マルクス主義哲学を、単に、マルクス主義の一構成部分にするに留まらず、最重要拠点として位置づけた。レーニン死後、ソヴィエト連邦政府においては、共産党一党支配の限界内ではあるが、政策の失敗の結果責任を取る形で政治的指導者の交代が行われてきた。一九二〇年代は、ソ連邦とコミンテルン内部において、マルクス主義をめぐる諸論争が比較的自由に行われていた。

一九二九年は、ブハーリンがスターリンとの権力闘争に敗北して失脚し、ソ連邦共産党内におけるスターリンの単独支配が開始される年であった。レーニンからブハーリンに至るソ連邦共産党の指導者達は、ロシア革命およびそれ以降の社会主義建設過程における自身の活動実績とそれに由来するカリスマ的権威によって指導者としての信任をそれなりに調達することができた。しかし共産党書記局を地盤として権力を拡大してきたスターリンは、それ以前の指導者達と比較して個人的な能力、活動実績、知名度に欠けるところが多く、継続中の共産党およびコミンテルン内部の権力闘争を勝ち抜くためには自分以外のカリスマ的権威を必要とした。そのためにスターリンが選んだ権威者がレーニンであった。スターリンによって構築されたイデオロギー闘争は、その全線に渡ってマルクス主義の「レーニン的段階」を強調し、それを承認するか否かを敵と味方を峻別する踏み絵として利用するという形式が採用された。今やマルクス主義に対してではなく、マルクス・レーニン主義に対して忠誠を示すことがコミンテルン影響下のあらゆる組織に強制された。

哲学分野におけるスターリン派の権力闘争は、ブハーリン失脚からやや遅れて一九三〇年以降、ミーチンを指導者としてデボーリン批判という形態で展開された。レーニンの『唯物論と経験批判論』と『哲学ノート』が聖典化され、「弁証法、認識論、論理学の同一性」テーゼを基礎付ける作業が、マルクス主義哲学の「レーニン的段階」にふさわしい課題として同時代のマルクス主義哲学者達の主要関心を独占していった。一九三〇年七月の三木のプロレタリア科学研究所からの追放は、スターリン派の権力とその正当化イデオロギーが日本のマルクス主義哲学研究者の世界にも及んだことを証言する出来事であった。

Ｂ．昭和思想史におけるマルクス問題

B-1.　戦前日本でマルクスの哲学についてある程度自由に研究することのできる時期は、一九二六年から二九年までの約三年間に限られていた。

一九一九年から一九四三年まで世界の共産党は、唯一の世界共産党（コミンテルン）として組織され、各国共産党はソ連邦共産党に従属する一支部にすぎなかった。この時代、ソ連邦共産党の内部事情が、世界のマルクス主義者たちの運命を決定した。

マルクスが哲学的諸著作・草稿を書いたのは、一八四〇年代に限られる。しかしモスクワのマルクス・エンゲルス研究所の所長リャザノフが編集した『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ *Marx-Engels-Archiv*』の第一巻（二三〇～三〇六頁）において、『ドイツ・イデオロギー』の第一巻第一章「フォイエルバッハ」が公刊されたのは一九二六年であった。これは、研究史上リャザノフ版と呼ばれている。『ドイツ・イデオロギー』全文は、一九三一年リャザノフがスターリンの粛清により逮捕（一九三八年処刑）されて後、マルクス・エンゲルス・レーニン研究所と改組された研究所の所長となったアドラツキーによって刊行された『マルクス・エンゲルス全集 *Marx/Engels historisch- kritische Gesamtausgabe*』（旧 MEGA[4]）の第一部第五巻として一九三二年に刊行された（アドラツキー版）[5]。また『経済学・哲学草稿』は、旧 MEGA の第一部第三巻として一九三二年に刊行されるまでは研究者の目に触れることはなかった。

一九二六年以前の段階において、マルクス主義哲学の古典的テクストとして流布していたのは、『反デューリング論』（一八七八年）、『フォイエルバッハ論』（一八八八年）などエンゲルスの諸著作であった。マルクスの死（一八八三年）後、マルクス主義の継承者となったドイツ社会民主党と第二インターナショナルの理論家たちにとってマルクス主義哲学とは、直接的には、エンゲルスの哲学であった。マルクスとエンゲルスの思想の同一性を前提にして、マルクス主義哲学の典拠としてエンゲルスの哲学的諸著作を引用するという慣行は、レーニンをはじめとするソ連邦共産党および第三インターナショナルの理論家たちにも継承された。かれらは、『経済学・哲学草稿』、『ドイツ・イデオロギー』などマルクスの初期哲学諸著作において展開された諸理論を、マルクスにおける唯物論概念の根本性格に関わる言説（それはエンゲルスの諸著作においてすでに与えられている）としてではなく、マルクス主義的唯物論の歴史的社会的諸現象への適用として解釈して、理論の整合性を維持することに努めた。

マルクスとエンゲルスの哲学的諸著作・諸草稿がほぼ刊行されている現在、われわれは、マルクスの唯物論理解とエンゲルスのそれとの間に原理的な違いがあったことを知ることができる。マルクスの初期哲学諸草稿が刊行される以前には、マルクスの哲学一般への批判としての実践的唯物論をエンゲルスの哲学（哲学的唯物論の最新形態としての）と区別して把握することには大きな資料的制約が伴っていた。一九二三年に公刊されたルカーチの『歴史

---

[4] 旧 MEGA の編集に携わった人々のほとんどが、スターリンの粛正の犠牲となった。その経緯については Hecker (2001)参照。

[5] 『ドイツ・イデオロギー』編集史上におけるリヤザノフ版、アドラツキー版の位置づけについては、平子（二〇〇六、二〇〇六ａ、二〇〇七、二〇〇七ａ）を参照。

と階級意識』は、マルクスの哲学の存在論的枠組みをある程度正確に再構成しており、後に公刊された『ドイツ・イデオロギー』や『経済学・哲学草稿』の内容を多くの点で先取りするものであった。第二インターナショナル・マルクス主義およびロシア・マルクス主義とは異なるいわゆる西欧マルクス主義の歴史は、本書から始まった。しかし西欧マルクス主義も、マルクスの思想を哲学的形態で記述することに終始した点で、マルクスの思想それ自体（哲学からの訣別）を基本的に捉え損ねていた。

B-2.三木清とマルクス主義哲学との出会い

三木がマルクス主義に積極的に関わるようになったのは、三年五ヶ月におよぶハイデルベルク、マールブルク、パリ留学を終えて帰国した一九二五年一〇月以降の時期であった。この時期は福本和夫の「社会の構成並に変革の過程―唯物史観の方法論的研究―」が公刊される時期（同年十一月）と重なり、日本においてマルクス主義に対する理論的関心が知識人や学生の間に一気に高まった時期であった。一九二六年六月から三木は、西田幾多郎の推薦により河上肇のためにヘーゲル弁証法の研究を指導し、同時に唯物史観の研究に着手し始める。帰国後一年半程の研究の成果を三木は、「人間学のマルクス的形態」（『思想』一九二七年六月）「マルクス主義と唯物論」（『思想』同年八月）、「プラグマチズムとマルキシズムの哲学」（『思想』同年十一月）を発表し、一九二八年五月にはそれらを収録した『唯物史観と現代の意識』（岩波書店）を公刊した。これによってマルクス主義哲学の代表的理論家としての三木の評価が定まった。

三木が、それ以前にエンゲルスやレーニンの哲学的諸著作の洗礼を受けていなかったことは、三木が両人の理論的枠組みから自由に、マルクスの哲学それ自身を直接に研究対象として設定することを可能にさせた。以下に、三木のマルクス主義哲学構想の形成にとって決定的な意味を持った思想的契機を列挙してみたい。

第一の契機は、三木が学生時代から既に歴史哲学の研究を志望し、ディルタイの歴史哲学および解釈学に通じていたことである。しかし、三木が最初の留学先としてハイデルベルク大学のリッケルトを選んだ（ハイデルベルク滞在は一九二二年六月から一九二三年夏まで）ことが示すように、三木の歴史哲学は、当初はなお新カント派の枠組み（主観－客観の二項図式を前提とするカント的構成説とそれに基づく諸科学の認識論的基礎付け）の枠内にあった。

第二の契機は、ハイデガー哲学との出会いである。三木の哲学を認識論的枠組みから存在論的枠組みへと決定的に転換させる契機となったものは、一九二三年秋マールブルク大学に移ってハイデガーに師事して以降のことであった。三木は、ハイデガーの下で、主観－客観の二項対立を前提とせず、現存在の存在の在り方 Modus に即して諸個人の生活と思考を記述する現象学的解釈学の方法を彼なりに修得していった。ハイデガーの哲学と出会う以前にディルタイの歴史哲学を熟知していたことが、三木にとって幸いした。ハイデガーは、『存在と時間』が示すように、ディルタイの歴史哲学を存在論的に乗り越えることを志向しながら、結局は、「歴史性」の基礎付けに失敗していると、筆者は考えている[6]。ディルタイの歴史的

[6] ディルタイとハイデガーの「歴史性」理解の相違を、両者の時間論の相違に着目して整理することを試みたものが、平子（二〇〇〇）である。

解釈学を参照しつつ、ハイデガーの実存論的解釈学を相対化して批判的に摂取する地点に立ち得たことが、重要な契機となった。

第三の契機は、パスカルの『パンセ』との出会いを契機として、フランスのモラリストたちの思想に親しく触れたことであった。

最後の契機は、一九二六年にリャザノフによって『ドイツ・イデオロギー』の第一部第一章「フォイエルバッハ」が公刊されたことであった。エンゲルスの哲学観ともレーニンのそれとも異なるマルクス独自の哲学観（哲学一般の批判としての実践的唯物論）の存在を証明する文献が、これによってマルクス研究史上初めて研究者の手に委ねられたのである。「人間学のマルクス的形態」には、リャザノフ版からの引用が五箇所挙げられている（三木　三、八頁、二七頁、三四頁、三八頁、四〇頁）。日本における独創的なマルクス主義哲学研究は、リャザノフ版『ドイツ・イデオロギー』の刊行によって初めて可能となった。三木は、岩波文庫に収録された『ドイッチェ・イデオロギー』（一九三〇年）の訳者でもあった[7]。

B-3.　歴史的存在論としてのマルクス主義哲学

三木のマルクス主義哲学理解の特徴は、第一に、マルクス主義哲学を唯物論の二〇世紀的形態として把握した点にある。現代マルクス主義哲学の理論構成において、マルクスその人の諸著作の正確な読解がその出発点にならなければならないことは言うまでもないが、それは一九世紀の思想状況に規定されているマルクス段階の思想の祖述に留まってはならず、二〇世紀の哲学的課題と水準に適合したものでなければならない。

第二に、三木のマルクス主義理解を特徴づけるものは、唯物論の二〇世紀的形態としてのマルクス主義をある独特な歴史的存在論として構想した点である。ここでは、第一に、マルクスの哲学の基本原理が存在論であること、第二に、この存在論はさらにあらゆる「存在するもの」の歴史性に照準を合わせる歴史的存在論であるという二点に注目しておきたい。

あらゆる理論・思想・哲学は、人びとの社会的生活＝社会的存在のただ中から歴史的に生成する。歴史的存在から理論が分節化されて形成されることを三木は、「歴史に於いて存在は存在を抽象することによって理論を抽象する」と表現した。この時三木は、自らの拠って立つ理論も含めあらゆる理論を、存在によって歴史的に抽象されて生成したものとして「イデオロギー」として把握し、あらゆる「イデオロギー」の存在からの「歴史的抽象」の過程を探求する学を「理論の系譜学」と呼んだ。三木は、諸理論の「歴史的抽象」過程を探求する系譜学を具体的に遂行する方法概念として「基礎経験」「アントロポロギー（人間学）」「イデオロギー」という概念系列を提起した。

「基礎経験」とは、理論が歴史的存在からまだ分節化されず、歴史的存在そのものに埋め込まれている状態であり、諸個人の経験ではあるが、あらゆる認識の前提となる主観・客観の区別の導入以前における経験、日常的慣習的実践と区別されない経験であり、その意味で一つの存在論的範疇である。

---

[7] 三木訳以前の翻訳としては、櫛田民蔵・森戸辰男訳（『吾等』に連載）、由利保一訳があった。三木は、「訳者例言」において『ドイッチェ・イデオロギー』を「唯物史観に関する最も重要な文書」（マルクス・エンゲルス　一九三〇、四頁）と述べている。

「アントロポロギー」とは、理論が歴史的存在から分節化されるその瞬間に着目して、それを歴史的に分節化＝「抽象」されつつあるその初発の直接的形態において把握する方法概念である。「アントロポロギー」は、諸個人が各人の人生において出会った諸々の経験をその当人に即して解釈（つまり「歴史的抽象」）したものであり、いわば固有名詞を付せられたロゴスである。

更に、この「アントロポロギー」としてのロゴスを制約していた固有名詞的各自性が捨象（匿名化）され、ある程度一般的に妥当する言説の姿で記述されること、これが「第二のロゴス」としての「イデオロギー」である。「イデオロギー」は、ある特定の時代・場所の思想形態として存在からの「歴史的抽象」をなし終えた諸言説であり、それらは議論され、批判され、流通して行く。イデオロギーを媒体として初めて公共圏が形成される。

「経験を救うというロゴスの課題は、それが客観的なる公共性を得ることによって初めて満足に解決される」（三木　三、 十一頁）。

三木にとって「イデオロギー」は「経験を救うというロゴスの課題」を実現し、公共圏を成立させるものとして積極的な意味を持ち、具体的には、個別諸科学、哲学、常識という三形態を含んでいる。

「イデオロギー」としてのロゴスはしばしば普遍妥当的な真理という形態を取って登場することによって、自らの存在の歴史的性格を隠蔽する。一社会において自明視されている常識もまたしかりである。「基礎経験」「アントロポロギー」「イデオロギー」は、没歴史的形態を纏って登場するあらゆる理論形態の歴史的性格を徹底的に解明し、諸理論をそれらが流通している時代・場所における人々の社会的実践の脈絡の中に位置づけるために導入された方法概念であった。

「一定の歴史的規定を有する交渉の仕方の根源的なる特性に応じて、観念論または唯物論は一定の時代に於いて、その現実性に於いて規定されて成立する。両者を単に抽象的に対立せしめ、その孰れが真であるかを単に抽象的に決定しようと欲することなく、却ってそれらを存在の大いなる歴史的進行の道程に於いて眺め、その必然性とその意義とを具体的に把握しようと試みることは、我々の哲学の企てに属している。」（三木　三　八一～八二頁）。

素朴実在論においては、存在は「意識的なもの」を何ら含まない物質に還元される。存在は意識を捨象して意識の外部に立つものと規定される。従って素朴実在論は、意識に対する存在の優位を主張するだけで、存在と意識との抽象的な二項対立を依然として克服することができない。これに対してマルクス主義的唯物論は、種々の意識形態を存在から分節化し、存在と意識の対立それ自体を存在から基礎付け展開する、そのような唯物論である[8]。

---

[8]　三木の存在把握は、ハイデガーの以下のような立場を踏まえている。

「認識することは、世界内存在としての現存在の存在様態のひとつであり、このような〔世界内存在としての現存在の〕存在構成 Seinsverfassung のうちに存在的に基礎付けられてい

B-4.　マルクス・レーニン主義者による三木批判の論理－三木のプロレタリア科学研究所からの追放の顛末－

マルクスの唯物論哲学をラディカルな歴史的存在論として把握し、自己が拠って立つ哲学理論さえもその理論が埋め込まれている歴史的生活世界の内部における実践的利害関心との連関の中でその理論としての（歴史的に限定された）存在意義を確証しようとする三木の立場は、ひとたび発見されて以降は、歴史的限定を越えて普遍的に妥当する「科学的真理」の体現者として自己規定していた当時のマルクス･レーニン主義とは基本的に相容れなかった。

マルクス主義の内部で三木清批判の口火を切ったのは服部之総（一九〇一～一九五六）であった。　服部によれば、哲学の歴史はあらゆる時と場所において、唯物論と観念論との闘争に帰着する。従って、あらゆる形態の哲学思想を貫いている観念論一般または唯物論一般の定義それ自体は、歴史を超越して妥当している。

それでは「全唯物論の一般的基礎命題としての哲学的唯物論」とは何か。それはエンゲルスとレーニンの次の主張に尽きる。

> 「精神と自然と何れが本源的かという、この問題に対する答え方につれて、哲学者は二大陣営に分裂した。自然に対する精神の本源を主張し、従って結局において何等かの種類の宇宙創造説を認容した人々は、観念論の陣営を構成した。･･･それに反して、自然を本源的なものと見た人々は、唯物論の種々の流派に属している。」〔エンゲルス『フォイエルバッハ論』からの引用〕（服部　一九七三、 三〇頁）。

服部によれば、唯物論と観念論の対立こそ最も重要な対立点であり、これに対してマルクス以前の唯物論とマルクスの唯物論との区別は本質的な問題ではない。興味深いことは、服部が「あらゆる歴史上の唯物論哲学に通ずる根本原理」（同書 五四頁）を説明するために引

る。」（Heidegger 1986, S.61）。「認識行為において現存在は、現存在においてその都度すでに発見されている世界に対する一つの新しい存在立脚点 *Seinsstand* を獲得する。〔認識という〕この新しい存在可能性は、自立的に形成され、課題として立てられ、学問として世界内存在に対して指導的役割を引き受けるようになることがある。しかし認識行為がまずあってそれが主観とある世界との『交渉 commercium』を創るわけではなく、また世界がある主観に及ぼす影響からこの交渉が発生するわけでもない。認識行為とは、世界内存在のうちに基礎付けられた現存在の様態の一つなのである。従って世界内存在を根本的構成 Grundverfassung としてあらかじめ解釈しておくことが必要となるのである。」（ibid. S.62）。

「基礎経験」とは、諸個人を「世界内存在」として把握するために、三木によって導入された方法概念であった。

用することのできる文献は、すべてエンゲルスないしレーニン[9]の著作であり、マルクスの著作からの引用は一つもないことである。

三木にとっては、実践こそマルクス主義の中核をなす存在論的概念であった。そして認識は、実践から分節化されると共に、再び実践へと送り返されて行く実践の一契機であった。ところが服部にとっては、実践とは、認識における真偽を確定するための「認識論における基準」（自然科学における実験に相当するもの）に過ぎない。

史的唯物論の位置づけをめぐって、両者の主張の違いを見ておきたい。三木にとってはマルクスの唯物論の根本原理は、認識論ではなく歴史的存在論であり、その核心は労働概念を中軸に据えた実践的唯物論であるという点に置かれた。服部の場合には、史的唯物論は歴史という特殊な分野においてのみ妥当する特殊理論に過ぎず、それはより上位の普遍妥当性を有する唯物論または唯物弁証法から派生したものにすぎない。

服部（佐伯）の批判に対して、三木は「唯物論とその現実形態」（『新興科学の旗の下に』第二巻第二号、一九二九年二月）において、以下のような反批判を展開した。

第一に、哲学も含めすべての理論は、歴史的性格を持っており、唯物論哲学と雖もその例外ではない。しかも「哲学を一般に観念論と唯物論との二大類型に分かつことは、一定の歴史的条件のもとに於いてのみ妥当する」（三木 三、三四九頁）ことであって、服部の主張するように哲学の歴史は時と所とを問わず唯物論と観念論の闘争の歴史に還元され、唯物論の立場は常に科学的真理を代表しているという主張は間違っている。

第二に、重要なことは、マルクス主義の唯物論の「現実形態」を探求することである（「唯物論の現実形態が問題なのである。」同、三六六頁）。従ってマルクス主義は、一九二〇年

---

[9] 服部は、自説の典拠としてしばしばレーニンの『唯物論と経験批判論』を引用するが、服部により引用されたレーニンの文章は、しばしば服部自身の主張とは別のことを述べている。

> 「唯物論者レーニンは、哲学的唯物論における物質と意識との対立の絶対性について左のごとくのべる－『勿論、物質と意識との対立は、極めて局限された範囲内においてのみ･･･即ち、･･･認識論上の基礎的問題の限界内においてのみ－絶対的意義を有するにすぎない。この限界の範囲の外では、この対立の相対性は疑いないことである。』〔レーニン『唯物論と経験批判論』からの引用〕」（服部　一九七三，四五頁）。

レーニンは「物質と意識との対立」が「絶対的意義を有する」のは「認識論上の基礎的問題の限界内においてのみ」であると述べ、しかも「認識論上の基礎的問題の限界内」とは「極めて局限された範囲内」であると但し書きを付けている。「この限界の範囲の外では」、つまり認識論的問題構成の外部に出て、実践を原理とする存在論の問題構成の立場から考察するならば、物質と意識の「対立の相対性は疑いないことである」、レーニンの文章は注意深く読むならば、このように解釈することができる。ところが服部は、この「認識論上の基礎的問題」を哲学的唯物論一般の根本的問題に昇格させ、「物質と意識との対立の絶対性」を承認することを、唯物論哲学であるか否かを決定する「踏み絵」としてしまっている。

代末の特殊な歴史的状況の中で、アクチュアルな理論として「形成、展開、発展」することができるための特殊な「理論的フロント」（三木 三、三三五頁）を見出さなければならない。

これ以降も服部による三木批判は、「観念論の粉飾形態」（一九三〇年五月）、「唯物弁証法的世界観と自然」（同年七月）と継続されて行くが、それは「唯物弁証法と唯物史観」において主張した内容を基本的に繰り返しているに過ぎない。

唯物論一般こそが真理であり、「現実の特殊なる唯物論は凡て、普遍に於ける唯物論若しくは唯物論のイデー（観念）の『適用』乃至は『拡張』に過ぎない」と主張する服部の論証方法は、普遍概念を実体化するプラトン主義であり、立場は唯物論であっても、「論証の仕方は、それ自身全く観念論的である」と、三木は批判した（三木・山崎・秋沢　一九三〇、七一四～七一五頁）。

栗原百寿は、三木のマルクス主義が、その発想の源泉をハイデガー、パスカル、アリストテレスなどの非マルクス主義的な哲学から引き出してきたことを批判した。栗原によれば、非マルクス主義な様々な哲学諸潮流との論争を通してマルクス主義哲学の二〇世紀的な「現実形態」を模索しようとした三木の努力それ自体が、そもそも「出発点に於いてあやまっていた」とされる。

「若しも三木氏にして尚且つマルキシストで止まりたいならば、その時氏はかかるあらゆる非マルクス主義的なものを全く振り払って、勇敢にマルキシズムの真只中に飛び込む可きである。ここにも途は二つしかない、ー所謂三木哲学を放棄して真正のマルキシズムに躍入するか、或いはあく迄三木哲学を支持して講壇の説教哲学として生きのびるか。」（栗原　一九三〇、八〇頁）。

寺島一夫「三木清とその哲学」も、三木がマルクス主義以外の諸思想を知りすぎていることを三木の躓きの石と見なしている。

「〔今日のブルジョア・インテリゲンチャのマルクス主義への転換が容易に起こり得ないその理由は〕彼がマルクス主義に接する前、すでに一定のブルジョア・イデオロギーの体系を自己の頭脳の中に植えつけているからである。この種の『造詣』が深ければ深い程、その根本的克服は困難でなければならぬ。･･･彼にあっては、マルクス主義はまず自己の体系を補足するものとして現れる。自己の古き立場から、取り入れた、マルクス主義の一面、之を基礎として成立した一つの新しい理論的均衡、それは彼にとっては･･･『マルクス主義の深化・発展』として映ずるという事である。･･･僕は三木氏とその哲学の中にこうした転化過程の一例を見るのだ。」（寺島　一九三〇、九三～九四頁）。

マルクス主義以外の教養を持っていればいるほど、「真性な」マルクス主義者にはなれない、「あらゆる非マルクス主義的なものを全く振り払って、勇敢にマルキシズムの真只中に飛び込む可き」だという栗原、寺島の主張は、すでに世俗外的教団宗教の教説に転じている。戦前のマルクス主義的知識人の少なからぬ人々にとって、マルクス主義は一つの宗教（イエスへの信仰にも似た）であり、それは当時の政治的状況下では、殉教の覚悟と結びついてい

た。この殉教のヒロイズムが、コミンテルンへの忠誠と結合して、あらゆる学問的な討論を封殺した。

一九三〇年五月、三木は、日本共産党に資金を提供したという嫌疑によって検挙された後、一旦釈放されたが、七月に起訴され、懲役一年、執行猶予二年の判決を受け、十一月八日まで豊多摩刑務所に拘留された。この拘留により三木は、法政大学教授の職を辞すことを余儀なくされた。

三木が拘留中の同年七月二一日、プロレタリア科学研究所は中央委員会を開催し、三木不在のまま、三木を『プロレタリア科学』編輯委員長および唯物弁証法研究会委員長の職から解任し、事実上、三木をプロレタリア科学研究所から追放する決定を行った。翌月の『プロレタリア科学』八月号は、プロレタリア科学研究所書記局名で「哲学に対する我々の態度」（以下「我々の態度」と略記）を公表した。

「我々の態度」は、現在の政治情勢を「資本家地主のブロック政権は必らず社会民主主義諸党と握手して社会ファシズムを形成する。･･･社会民主主義者との･･･理論的実践的闘争に主力を集中する事なくしては、今日のこの状態から一歩もすすむ事は出来ぬ」（『プロレタリア科学』第二年第八号、一九三〇年八月、二〇二頁）と把握した。これはその前年（一九二九年）七月コミンテルン執行委員会第一〇回総会で決定されたいわゆる「社会ファシズム」論に基づいて、プロレタリア科学研究所の理論闘争の当面の対象を社会民主主義とりわけその左派に集中しようとするものであった。このような情勢認識から「我々の態度」は、三木哲学を「同伴者的な小ブルジョア的インテリゲンチヤのイデオロギー」と規定しつつ、「社会ファシズム」との闘争が喫緊の政治的課題となっている現在の情勢下では、「マルクス主義哲学の、社会民主主義的・解党派的歪曲を、彼等の階級的・政治的根拠の光にてらして、具体的に非難する事。（三木哲学の批判もこの一つに入る）」をプロレタリア科学研究所の当面の最重要の理論的課題の一つとして提起した。

「我々の態度」は、さらに、「三木哲学批判者達〔具体的には服部之総、加藤正、寺島一夫など〕の哲学者的態度が、三木哲学のそれと共に、問題を終にその核心から外れさせ、日本プロレタリアートの実践と何等のかかわりもない紙上論争にみちびいた事は大いなる罪悪である」（同所）とまで断罪している。

三木は、共産党に資金を提供し、それが共産党内のスパイを通じて特高警察に通報され、その「罪」により刑務所に拘留され、法政大学教授の職を奪われた。同じ共産党の指導下にあったプロレタリア科学研究所中央委員会によって、三木は「社会ファシズム」への道を準備する「社会民主主義」のイデオローグとして断罪され、指導的職務を解任され、事実上研究所から放逐された。三木自身は、このような待遇を受けた事に対して一言も抗弁することなく、この後マルクス主義と袂を分かって行く。

一九三〇年、この年は、日本のマルクス主義哲学が、創造的発展の可能性を自から摘み取った年として記憶して良いであろう。

B-5.　戸坂潤の唯物論

戸坂（一九〇〇～一九四五）の経歴は、リッケルト、ハイデガー、マンハイム、レーヴィット、ガーダマーら同時代のドイツの錚々たる哲学者との交流に彩られた三木のような華麗

さはない。戸坂は、一高在学中（一九一八〜一九二一）は理科に所属し、数学および自然科学の勉強に打ち込んでいた。一九二一年に京都大学文学部哲学科に進学した後も、数理哲学を専攻し、空間論に関する初期の諸論文においても主要な関心は、数学的空間と物理的空間の関係に関する科学論的な基礎付けに置かれていた。

戸坂にとってマルクス主義的唯物論への決定的な第一歩が踏み出されるのは、一九二六年に発表された「範疇としての空間について」であった。二部からなる本論文前半部の主題は、空間は「認識論的」範疇ではなく、「存在論的」範疇であるという点であった。「存在の存在論的範疇は空間である。」（戸坂　一、四四二頁）。ここには明らかにハイデガーの批判的受容の跡が認められる。戸坂は、後半部において空間の「存在の存在論的範疇」としての意味をさらに分析して行き、最終パラグラフにおいて「空間は性格にぞくす」（戸坂　一，四六一頁）という結論に到達する。戸坂のこの論文は、ハイデガー哲学とリャザノフ版『ドイツ・イデオロギー』とを対決させながら、日本独特のマルクス主義哲学が形成されてゆく過程を生き生きと示すドキュメントである。

戸坂の哲学的立場の大転換をもたらしたものは、三木との交流であった。戸坂は、三木の帰国（一九二五年一〇月）後直ちに、三木をチューターとする研究会「哲学一高会」を組織し、研究会を通して留学中の三木に大きな影響を与えた諸思想（ディルタイ、ハイデガー、モラリスト）を精力的に摂取していった。三木が留学中に得た諸知識をマルクス主義的理論として再構成するまでの全期間を、戸坂は三木と共にリアル・タイムに体験している。ハイデガーをはじめとする同時代のヨーロッパの哲学事情に関しては、戸坂は三木から教えられる立場であった。しかしマルクス主義的哲学の基礎付けという点では、戸坂は三木の「人間学のマルクス的形態」（一九二七年六月）より早く、空間の存在論的範疇としての「性格」概念の構想を獲得している。マルクスという名前も唯物論という用語も登場してはいないが、、戸坂の唯物論哲学の最も基礎的なカテゴリーが「性格」であった。

一九二六年〜一九二七年は、リャザノフ版『ドイツ・イデオロギー』刊行の衝撃の中で、三木と戸坂においてほぼ同時に日本のマルクス主義的唯物論が誕生した年として記憶されて良い。

三木が、マルクス主義者たちによって追放された後、マルクス・レーニン主義の教義への忠誠がコミンテルンを通じて強制され、他方では、それに迎合するマルクス主義者たちが大勢を占める中で、三木が切り開いた地平を更に開拓していった人が、戸坂潤であった。戸坂の諸著作の特徴は、自らの言説を、当時のマルクス主義者たちの常套作法であったマルクス、エンゲルス、レーニンらの諸著作からの引用によって自説の正当性を根拠づけるという言説を用いないことである。そこには、当時の特高警察らによる検閲を回避する以上の意味があった。初期の二作（ジャック・アマダール『公算論の諸原理』、『哲学研究』第八巻九三号、一九二三年、ヴィンデルバンド『意志の自由』大村書店、一九二四年）を例外とすれば、戸坂が哲学およびマルクス主義諸文献の翻訳を全く行っていない[10]ことも、翻訳に明け暮れていた同時代のマルクス主義者たちに対するかれの批判的意志の表現と、解釈したい。戸坂の思想は、一九三六から一九三七年にかけて慣行された諸著作（とりわけ『思想と風俗』『現

[10] 唯一の例外は、一九三六年の「訳述、ブリッジス、ティルトマン『探検英雄伝』改造社」である。

代日本の思想対立』一九三六年、『世界の一環としての日本』一九三七年）において、当時の民衆の日常性に根ざした風俗と思想を考察の対象にする地平にまで進んでいった[11]。戸坂の理論はなお発酵過程にあったと考えられるが、これ以降の発展の可能性を奪ったものは、一九三七年末に執筆活動を禁止し、翌三八年十一月検挙（一九四〇年五月まで杉並警察署に留置）した特別高等警察であった。

C. 終わりに

拙稿「戦前日本マルクス主義の到達点―三木清と戸坂潤―」（平子友長　二〇〇六ｂ）に対して、小浜善信教授より次のようなコメントをいただいた。

「戸坂が思い描いている『大衆』『大衆の風俗』とはどのようなものであったか分かりませんが、少なくとも『ブルジョアジー』との二項対立における『プロレタリアート』ではなかったと思いますが、いかがでしょうか。無名の衆生－しかも悲痛の声さえ漏らせぬ衆生というところまで考えていたのでしょうか。思想は人のためにあるのであって、人が思想のためにあるのではないと思いますが、『大衆』に寄り添う振りをした思想が悲痛の声さえ漏らせぬ衆生を犠牲にしてきたこともしばしばだったと思います。日本のマルクス主義者に欠落していたのは、『大衆』つまり『悲痛の声さえ漏らせぬ衆生』という視点だったと思います。これは、私がマルクスを読み始めた高校生の頃から現在にいたるまで、いわゆる『マルクス主義者たち』『科学的社会主義者たち』に対してずっと持ち続けてきた思いです。」（小浜善信教授より筆者宛の私信、二〇〇六年十一月二二日付、傍点は筆者）

「思想は人のためにあるのであって、人が思想のためにあるのではない」という立場は、マルクスがフォイエルバッハも含め青年ヘーゲル派の理論家たちを批判する際の基本的立脚点であったし、「人のためにある思想」を探求するためにマルクスは、哲学という抽象的思考形態と訣別し、終生、経験的研究に没頭した。しかしマルクス死後、マルクス主義は、「科学的真理」、「歴史の必然性」などを振りかざす理論に変貌していった。戸坂の思想が、これらのマルクス主義者たちとは袂を分かつものであることは確信を持って言うことができるが、はたして「悲痛の声さえ漏らせぬ衆生」までとどく思想であったか否か、筆者は、現時点では未だ確言することができない。なによりも筆者自身が「悲痛の声さえ漏らせぬ衆生までとどく思想」について論じる資格があるのかどうかを、厳しく問いただしつつ、筆者の研究もまたそういう方向の研究でありたいと希求する。

「『「いき」の構造』の主人公は、･･･『世間からつまはじきされるアウトサイダー』たちである。そして、その『アウトサイダー』たちのモデルは、･･･周造の母だったはずである。･･･『遊郭』が、ときとして、いやしばしば悲痛の声さえ漏らせぬ『苦海』であることは、周造も承知していたはずである。だれもそのような生を自ら選んだわけでもなければ、

[11] 今回は検討できなかった戸坂の風俗論については、平子（二〇〇六ｂ）を参照。

選べたわけでもない。＜Geisha＞の中に記された文章は、苦海に生きるアウトサイダーたちについて･･･苦海という川に『･･･うき（浮き・憂き）身』を沈める彼女たちの生は救われなければならない、『影には影の幸』がなければならないという、かれの思いがこめられたそれというべきであろう。『「いき」の構造』は、周造の、アウトサイダーたちへの共感を根底に持つ書、彼女たちの、したがって何よりも、悲しい運命を身に負った母の『救い』を、その隠された意図としてもつ書であったと思われる。」（小浜二〇〇六ａ、一〇頁）

小浜教授のこの文章に接して、マルクスの生涯（とりわけ『資本論』第一巻初版刊行以降の）もまた、資本主義世界システムの文明化作用から「つまはじきされた」「悲痛の声さえ漏らせぬ衆生」の声を聴き取り、それを言説化しようとして、ついに果たせずに終わった（膨大な『抜粋ノート』が遺された）生涯ではなかったかと、筆者は思う。それを文献的に可能な限り実証する作業が、筆者の今後の課題である。

参照文献（配列はアルファベット順）

三木清からの引用は、『三木清全集』全二〇巻、岩波書店、一九八四～八六年を用いた。本書からの引用は、例えば（三木 三、二〇頁）の様に巻数と頁数で表示する。また戸坂潤からの引用は、『戸坂潤全集』全五巻（一九六六～六七年）および補巻（一九七九年）、勁草書房を用いた。本書からの引用は、例えば（戸坂 三、二〇頁）の様に巻数と頁数で表示する。

藤田正勝（一九九八）『現代思想としての西田幾多郎』講談社選書メチエ
藤田正勝（編）（二〇〇一）『京都学派の哲学』昭和堂
藤田正勝・Ｂ・デービス（編）（二〇〇五）『世界の中の日本の哲学』昭和堂
藤田正勝（二〇〇七）『西田幾多郎』岩波書店
福本和夫（一九七一）「社会の構成並に変革の過程―唯物史観の方法論的研究―」『福本和夫初期著作集』第一巻、こぶし書房
Hecker, Rolf et al.(2001), *Stalinismus und das Ende der ersten Marx-Engels-Gesamt ausgabe (1931-1941), Beiträge zur Marx-Engels-Forschung Neue Folge Sonderband 3*. Argument Verlag, Berlin – Hamburg.
Heidegger, Martin (1986), *Sein und Zeit*. Sechzehnte Auflage. Max Niemeyer Verlag Tübingen.
服部之総（一九七三）「唯物弁証法と唯物史観」『服部之総全集』第二巻、福村出版
服部之総（一九七三ａ）「観念論の粉飾形態―三木哲学の再批判―」『服部之総全集』第二巻、福村出版
服部之総（一九七三ｂ）「唯物弁証法的世界観と自然―三木哲学における弁証法―」『服部之総全集』第二巻、福村出版
加藤正（一九三〇）「三木哲学に対する覚書」『プロレタリア科学』第二巻八号、一九三〇年八月

川内唯彦（一九三〇）「マルクス主義は宗教にいかなる態度をとるか」『プロレタリア科学』第二巻六号、一九三〇年六月
清眞人編集（二〇〇二）『参照点　三木清』『共同探求通信』第一九号（独立特別号）、二〇〇二年二月
高坂史朗（一九九〇）『悪の問題』昭和堂
高坂史朗（一九九七）『近代という躓き』ナカニシヤ出版（中国語版河北人民出版二〇〇六年、韓国版而立社二〇〇七年）
高坂史朗（共編著）（二〇〇三）『東アジアと哲学』ナカニシヤ出版（中国版沈陽出版社二〇〇二年）
小山弘健（一九五六）『日本マルクス主義史』青木書店
栗原百寿（一九三〇）「相対主義と浮浪的弁証法」『思想』第九八号、一九三〇年七月
Marx, Karl (1962), *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Erster Band*. In: Karl Marx/ Friedrich Engels, *Werke, Bd. 23*. Dietz Verlag Berlin.
Marx, Karl (1969), Thesen über Feuerbach. Karl Marx/ Friedrich Engels, *Werke, Bd. 3*. Dietz Verlag Berlin.
Marx, Karl (1982), *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*. Karl Marx/ Friedrich Engels, *Gesamtausgabe (MEGA), I-2*, Dietz Verlag Berlin.
Marx, Karl/Engels, Friedrich (2004), *Die Deutsche Ideologie*. In: Karl Marx/ Friedrich Engels/ Joseph Weydemeier, *Die Deutwsche Ideologie*. Bearbeitet von Inge Taubert et al., *Marx-Engels-Jahrbuch 2003*, Akademie Verlag Berlin.
マルクス・エンゲルス（一九三〇）『ドイッチェ・イデオロギー』リヤザノフ編、三木清訳、岩波書店
三木清・山崎謙・秋沢修二（一九三〇）「唯物論は如何にして観念化されたか」『思想』第九七号、一九三〇年六月
中村行秀（二〇〇五）「日本における唯物論哲学［研究］の進化―「マルクス・レーニン主義哲学」の受容・批判・克服の過程として―　」古田光二ゼミナール報告、二〇〇五年六月四日（未公刊）
中村行秀・北村実・平子友長・嶋崎隆（二〇〇七）「座談会　唯物論研究と東京唯物論研究会の歴史（前編）」、東京唯物論研究会編『唯物論』第八一号
小浜善信（二〇〇六）『九鬼周造の哲学―漂白の魂―』昭和堂
小浜善信（二〇〇六ａ）「九鬼周造－一切衆生への愛」『図書』二〇〇六年一〇月号、岩波書店
大野真弓編（1965）『イギリス史（新版）』山川出版社
プロレタリア科学研究所書記局（一九三〇）「決議　哲学に対する我々の態度－三木哲学に対するテーゼ」『プロレタリア科学』第二巻八号、一九三〇年八月
プロレタリア科学研究所中央委員会（一九三〇）「急告」『プロレタリア科学』第二巻八号、一九三〇年八月
平子友長（一九九一）『社会主義と現代世界』青木書店
平子友長（一九九七）「歴史における時間性と空間性―和辻哲郎、ハイデガーおよびブローデル―」『経済学研究』第四七巻二号、北海道大学

平子友長（一九九八）「和辻哲郎の風土論における日本認識とオリエンタリズム」『共同探求通信』第一三号
平子友長（二〇〇〇）「解釈学の批判的継承に向けて」『社会学研究』（一橋大学）第三八号
平子友長（二〇〇二）「三木清の思想のアクチュアリティ」『共同探求通信』第一九号（三木清特集号）
平子友長（二〇〇二 a）「三木清『構想力の論理』の論理構造」『共同探求通信』第一九号（三木清特集号）
平子友長（二〇〇二ｂ）「三木清研究の方法、主題、意義をめぐって」東京唯物論研究会『唯物論』第七六号
平子友長（二〇〇五）「三木清と読書」『社会学研究』（一橋大学）第四三号
平子友長（二〇〇五ａ）「マルクスの資本主義認識の変遷」中国弁証唯物主義研究会編『中国“馬克主義哲学当代形態”学術検討会論文集』（タイトル中国語）pp.15-29（中国語） pp.30-48（日本語）
平子友長（二〇〇五ｂ）「マルクスにおける唯物論と弁証法」中国弁証唯物主義研究会編『中国“馬克主義哲学当代形態”学術検討会論文集』（タイトル中国語）
平子友長（二〇〇六）「新メガ版『ドイツ・イデオロギー』の編集と廣松渉版の根本問題（上）」（大村泉、渋谷正との共著）『経済』新日本出版社
平子友長（二〇〇六ａ）「新メガ版『ドイツ・イデオロギー』の編集と廣松渉版の根本問題（下）」（大村泉、渋谷正との共著）、マルクス・エンゲルスの会編集『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第四七号、八朔社
平子友長（二〇〇六ｂ）「戦前日本マルクス主義の到達点―三木清と戸坂潤―」岩波講座『「帝国」日本の学知』第８巻「空間形成と世界認識」（山室信一編）、岩波書店
平子友長（二〇〇七）「廣松渉版『ドイツ・イデオロギー』の根本問題」マルクス・エンゲルスの会編集『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第四八号、八朔社
平子友長（二〇〇八）「三木清と日本のフィリピン占領」、清眞人、津田雅夫、亀山純生、室井美千博、平子友長『遺産としての三木清』同時代社
寺島一夫（一九三〇）「三木清とその哲学」『プロレタリア科学』第二巻六号、一九三〇年六月